徳島市入田町入田瓦窯跡調査概報

徳島県那賀郡古屋岩蔭遺跡調査概報

昭 和 ４４ 年 度

徳島県博物館建設記念学術奨励基金運用委員会

徳島市入田町内の御田瓦窯跡調査概報

立　　花　　博
天　　羽　　利　　夫

1　序

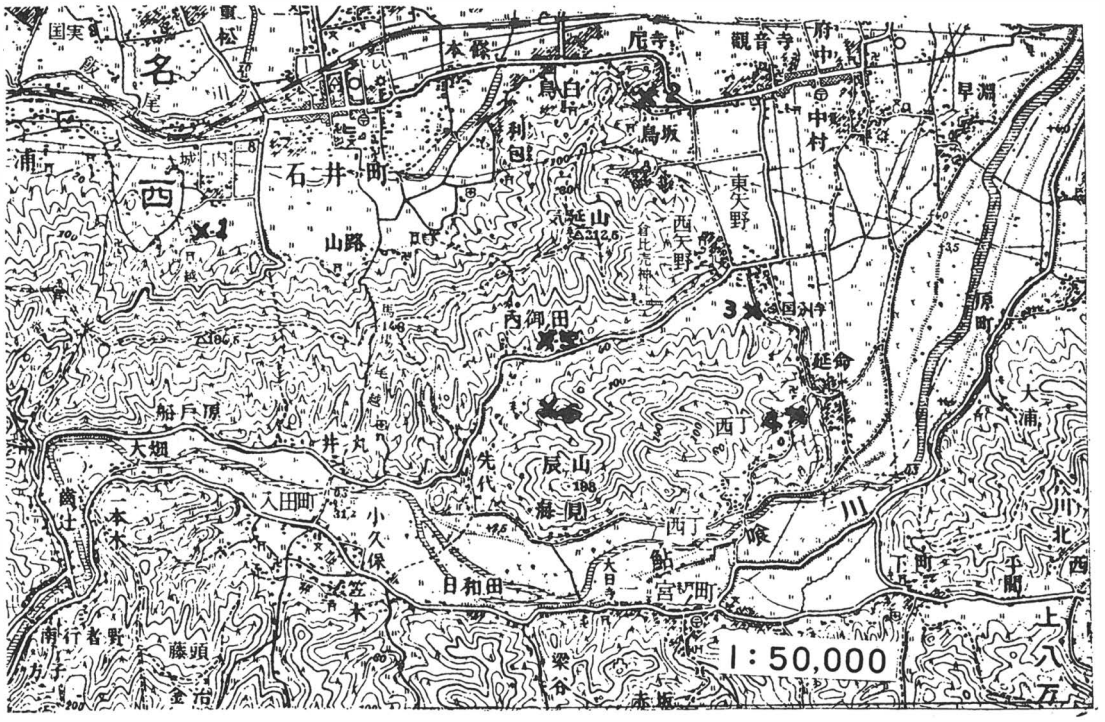
入田瓦窯跡は，戦後まもない頃，土地所有者の阿部岩蔵氏が赤土採取中偶然発見したものである。その後，昭和28年７月21日に，徳島県指定史跡になり木造の被覆施設をつくって，保護してきたが，これも永年のため腐朽し，また焼成部中央の孔穴からの崩壊もいちじるしくなってきたので，恒久的な保護施設工事を行なうこととなった。その基盤工事施工のため，それに先だちこの調査を実施したものである。

調査期間　　昭和43年１月４日～18日
調　査　員　　立花　博・天羽利夫
調査協力者　　岡本　坦（早大学生）小松島西高校郷土研究クラブ員

2　入田瓦窯跡の位置

入田瓦窯跡は，徳島市入田（にゅうた）町字内の御田（うちのみた）309番地にある。

第1図　徳島市入田町（川島５万分の１）



1　石井廃寺址　2　国分尼寺址（推）　3　国分寺址　4　旧常楽寺址（伝）　5　入田瓦窯址　6　入田須恵窯址

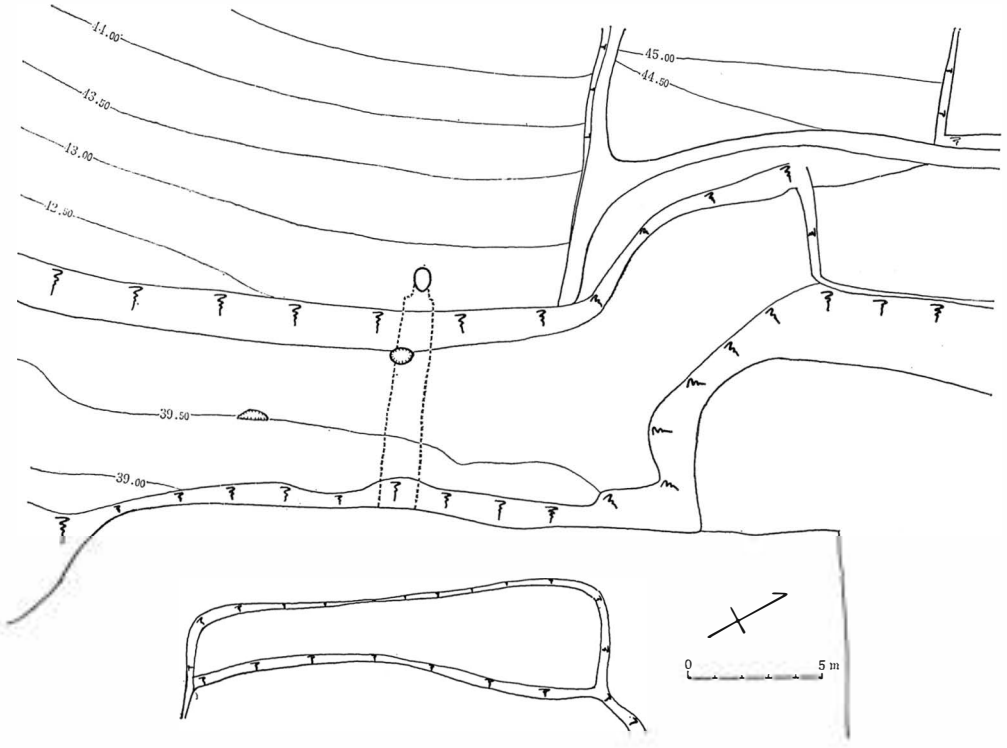
入田町内の御田は，徳島市の最西部で名西郡と境を接する所で，北の気延山（212.5メートル）と南の辰ケ山（197.6メートル）にはさまれた狭隘な所である。（第１図）

この内の御田には，この瓦窯跡にあい対する南の辰ケ山の麓にも，須恵窯と推定される窯跡が一基認められている。その他古墳も三基ほど見られる。またこの東に隣接する国府町には，国分寺址，国分尼寺址をはじめ，気延山を北西に越えた石井町にも石井廃寺址があり，その他この近辺は遺跡の多い地域である。

3　入田瓦窯跡の構造

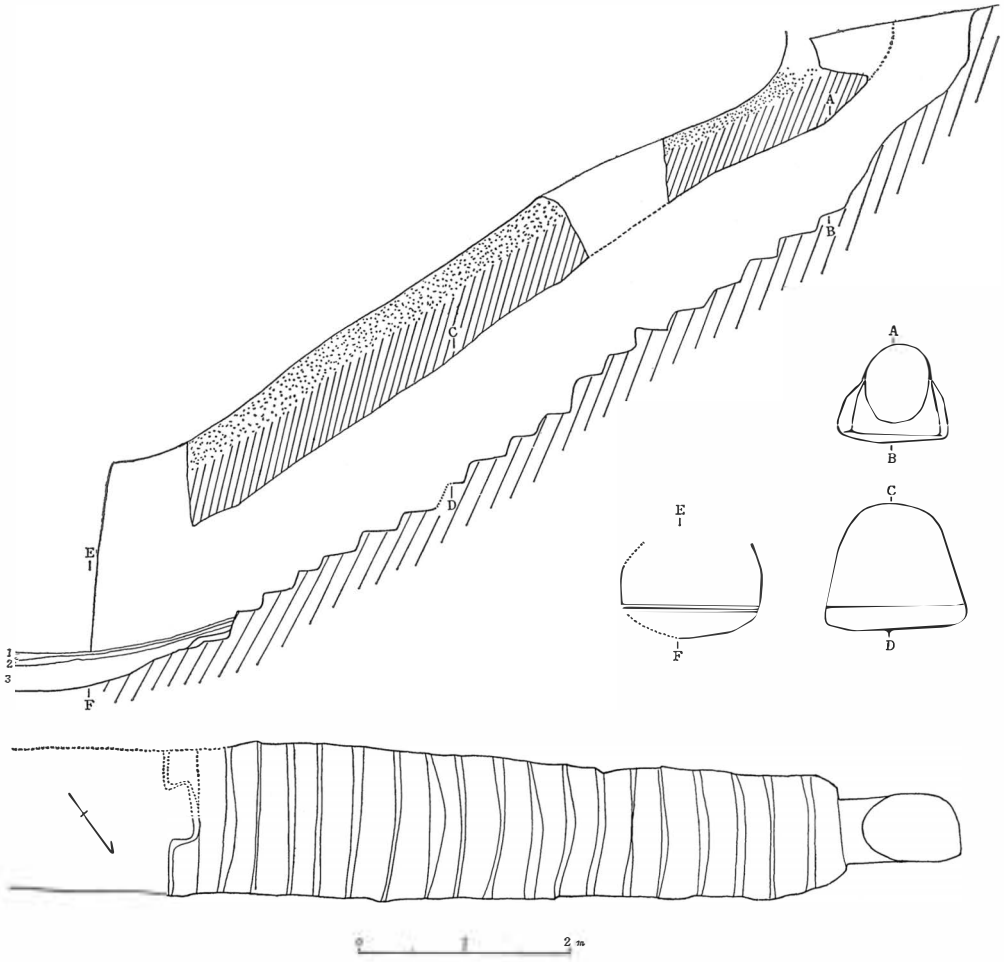
入田瓦窯は，気延山（212.5メートル）からしだいに高さを減じながら南にのびる小舌状丘陵地の東斜面に，主軸をN―54°―Wの方向にむけ，地表下約80センチメートル，焼成部の水平面と煙り出しの直立転換点との比高約６メートルの高低差をもたせ，泥質片岩を穿ち，アーチ状に刳り抜きトンネル状に構築した瓦窯である。（第２図）

第2図　　瓦窯跡付近の地形



この瓦窯の焚口は，土取工事のため欠失しその痕跡はない。これに続く焼成部は僅かに残り，その残存部の上に約1.8メートル高さに石を積み重ね，崩土を防ぐ石垣を構築し窯口を閉塞している。この石垣の前面は僅かな平坦地を三段形成し，耕作地に利用されており，その付近にあったと推定される焚口，および窯に付随する灰原等の検出は不可能に近く，その規模，構造を窺知することさえできない。また燃焼部は一部残存するとはいえその全体の広さを確認することは困難である。煙り出しおよび焼成部は，天井の一部が穿孔されてはいるが，ほとんど完全に残り，その規模，構造などを知

第3図　瓦窯の規模と構造



るには充分なものであった。また，煙り出しおよび焼成部の天井の孔穴から土砂が流入し，焼成部のほとんどを埋めつくしていたため，窯底自体も損壊されることなく残存していた。（第3図）

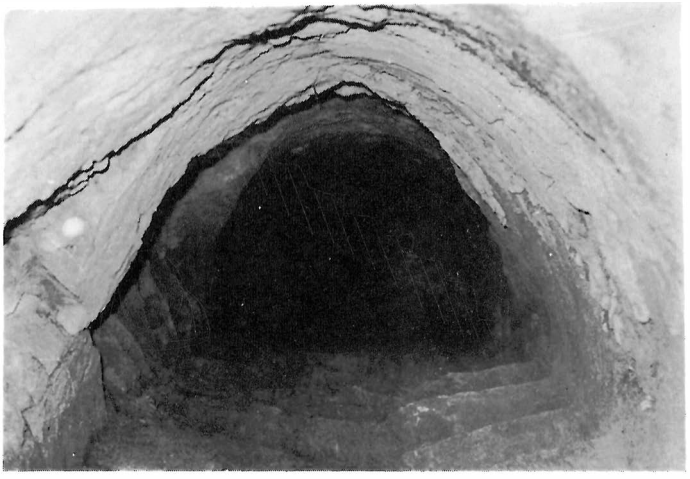
(1) 煙り出し（第1図版）

断面は，長径80センチメートル内外，短径65センチメートル内外の楕円形を呈し，焼成部の最奥の窯尻から約50°～60°の勾配をもちながら1.3メートルで直立に向き

第1図版　煙り出し

をかえ僅かな長さで地表に達す。その壁面は地山を刳り抜いたままであり，熱の作用をうけ赤褐色に変色している。

第2図版　焼　成　部



(2) **焼成部**（第2図版）

焼成部の床は岩盤を掘り削り，19段の階段をつくっている。第一段は，当初の段が削平したためか平瓦と青灰色粘土で段状に補修されている。同様に，各段にも平瓦と粘土をもって踏面を整備したところも見うけられる。

天井および側壁は，「スサ」入りの粘土で上塗りをしてあり，ところどころに補修のあとがみられる。その厚さが3センチメートルにもおよぶところもある。またその剥落も著しく，特に側壁面ではそれが顕著である。

最上段から最下段までの長さは7.56メートル，床面は約35°前後の傾斜をもつ。階段の各段の高さは，それぞれ異なるが踏面の奥行は約30センチメートル内外でほぼ等しい。踏面から天井までの高さは

5段目　110センチメートル
10段目　118　〃
15段目　110　〃
最上段　85　〃

であり，中央でやや高く，窯尻によるにしたがって低くなる。焼成部の各段の幅は

5段目　144センチメートル
10段目　136　〃
15段目　122　〃
最上段の前端　104　〃
最奥壁　67　〃

であり，幅は窯尻にいくにしたがい漸減し，煙り出し部との接点では極端に狭くなる。

第3図版　燃　焼　部

(3) **燃焼部**（第3，4図版）

燃成部との境には，階はみうけられなく，緩やかな斜面で焼成部と接している。側壁の岩盤が剥落

第4図版　燃焼部と遺物出土状況

し，燃焼部の幅，高さおよび広さを確認することはできないが，幅が約1.4メートル内外，高さは1メートル内外であったろうと思われる。

床面は，三層からなり，それぞれの層に瓦片が含まれており，また第三層上部には，前述の流入上が累積し，その中に瓦片，土器類が検出された。

第1層は焼土の層からなる。この焼土の層が最終に使用された燃焼部の床面と考えられる。第2層は褐色土層からなり，第3層は撹乱された層であり，当初に使用された燃焼部を築きなおしたものと考えられる。焼成部の第一段もこの時の補修と思われる。

4　出　土　遺　物

遺物は，焼成部の階段の踏面に粘土とともに密着した状態で平瓦片が，焼成部下段と燃焼部に累積した流入土の中に瓦片，土器類が検出された。

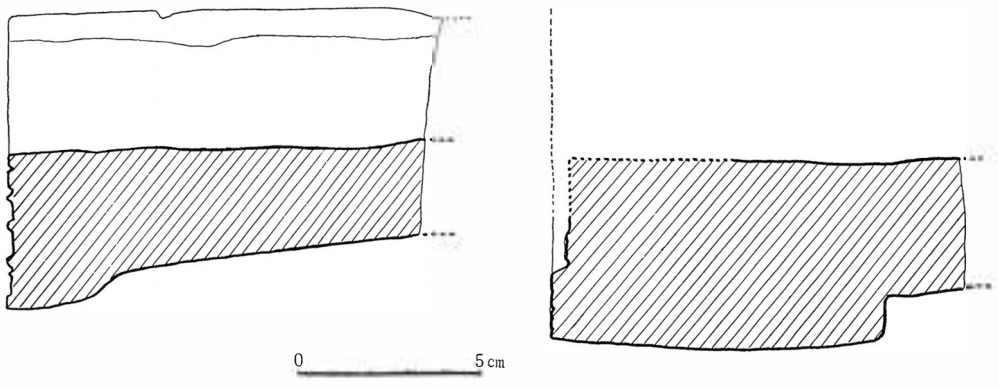
(1)　瓦　　類

平瓦がほとんどであり，丸瓦はきわめて少ない。また，軒平瓦は三片あり，軒丸瓦は一片も検出されなかった。

①　軒　平　瓦（第4図，第5，6図版）

軒平瓦三片のうち，文様の識別できるものは二片で，そのうち一片は文様の完全なものであり，一片は，外区下帯の一部のみが判明できる残欠片で，他の一片は顎のみがみられるものである。文様の

第4図　軒　平　瓦　　左　A類軒平瓦　　右　B類軒平瓦



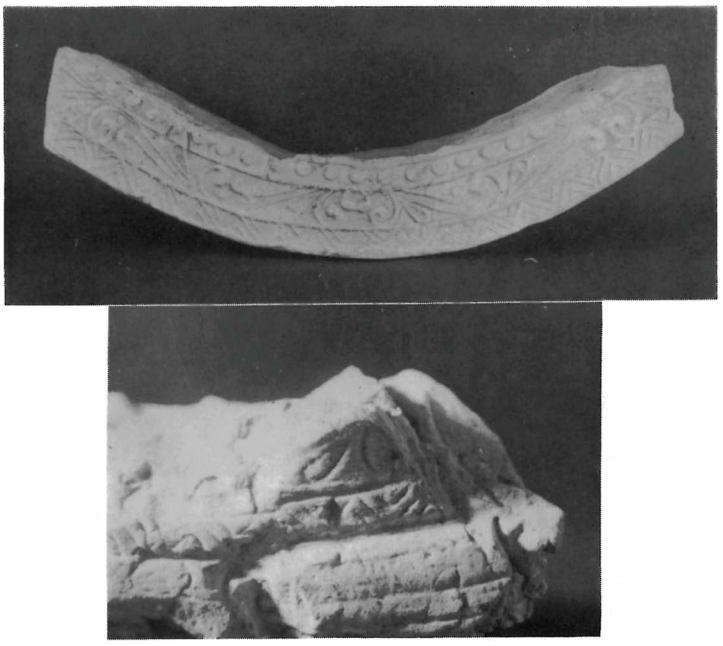
ある2片の軒平瓦の残片をA類，B類と仮に呼ぶこととする。

A類軒平瓦

判然としにくい顎があり，胎土には極少量の砂を含み，焼成は軟かい。瓦裏面は叩き文を消し，滑らかに調整され，表面には布目痕を残し，模骨の形状をとどめた痕がみられる。

文様は，外区上帯に珠文，下帯に三条の線からなる山形文，内区は中心飾を中央に左右均整唐草文がみられる。瓦の法量は次の表のとおりである。

第5図版　上　A類軒平瓦　　下　B類軒平瓦



A類軒平瓦の法量　cm

上弦孤	孤の深さ	下弦孤	厚さ	内区厚さ	外区上帯厚さ	外区下帯厚さ	文様の深さ	長さ
28.3	4.4	34.3	4.2	1.6	1.2	1.4	0.1	——

第6図版　軒平瓦拓影

B類軒平瓦

きわめて判然とした段顎をもち，胎土はA類軒平瓦と同様に少量の砂を含み，焼成も軟かい。顎は，前面に僅かに張り出し，その面に沈線で孤状の線がひかれている。文様は外区下帯は三条の線による山形文であり，内区は残欠部より均整唐草文様と思われる。外区上帯は欠損のため不明である。A類軒平瓦と異なりB類軒平瓦は陰刻による施文であることは注目すべき点であろう。またこの軒平瓦の形成にあたり，その叩きしめが不充分であったためか，模骨に粘土をなでつけて成形したと考えられる接合面が層となってみられる。これがこの瓦の剥離されやすい原因ともなっている。

② 平　瓦（第７図版）

平瓦はありふれたものであるが，裏面に縄目の叩き文，蓆目の叩き文を残したものと，叩き文をすり消し，平滑に磨いたものの三種類がみられ，側縁には，三回へら削りをなし丸味をもたせたものがみられる。（第７図版中段）

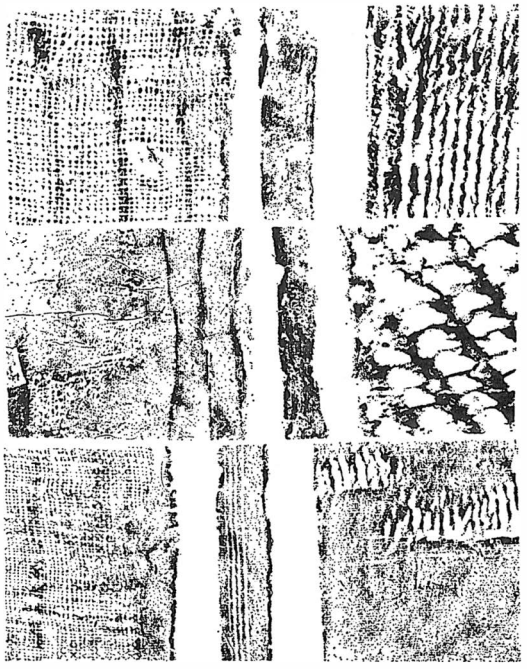
③ 丸　瓦

平瓦の叩き文をすり消した技法と同じ技法によるもので，玉縁はないものである。

⑵ **土器類**（第５図）（第８図版）

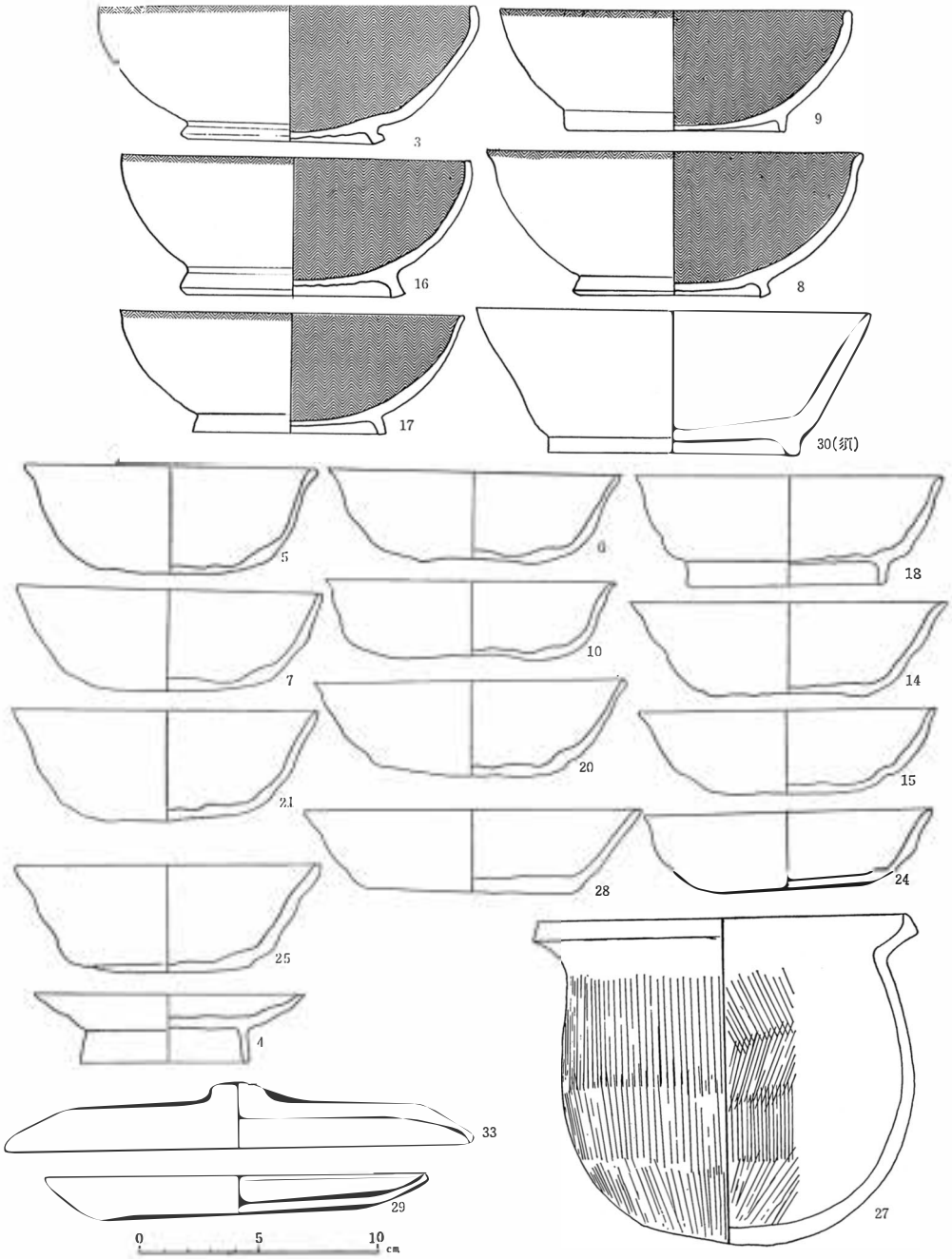
土器類は，燃焼部の第一層上の累積土の中に検出したもので，土師器が主であり，須恵器は一個体にすぎない。杯，椀，皿，壷の組み合わせとなっている。その法量，成形上の特色は次の表のとおりである。杯は口径14センチメートル以上，以下を椀，器高３センチメートル以下を皿とした。

第７図版　平　瓦　拓　影

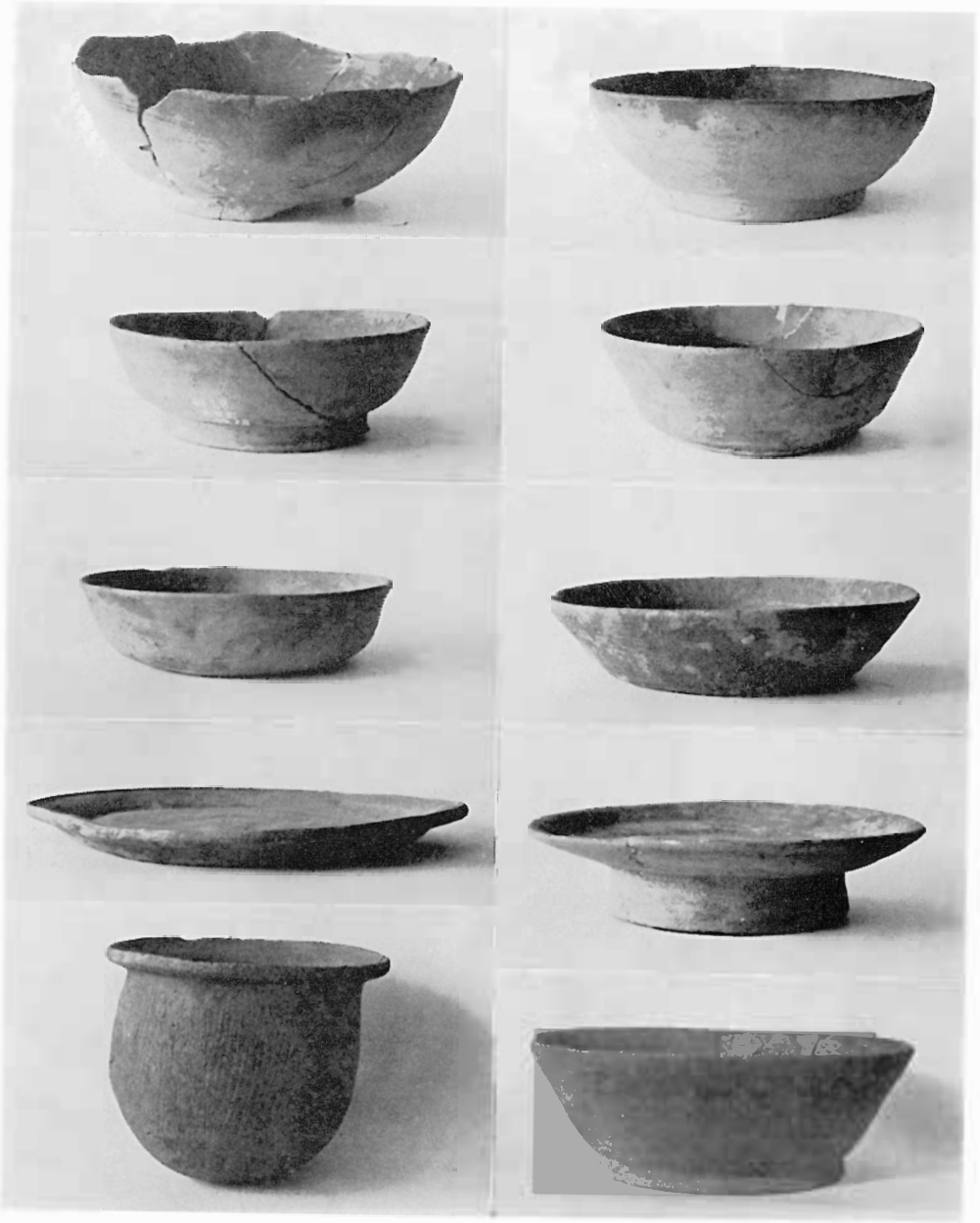


名称	法量	個数	土器番号	口縁部	体部	底部	色調	質	内部	備考
杯	高さ 5.3～6.0 口縁径 14.7～16.4	5	3 16 17 9 8	横なで まるみ	ゆるやかな弯曲 へら磨き へら削り	へら削り 付高台	赤褐色	軟	黒いぶし へら磨き	黒色土器
杯	〃 7.0 〃 16.6	1	30	端部ややまるみ	外傾	高台	淡灰黒色	やや硬	横なで	須恵器
椀Ⅰ	〃 4.6 〃 13.0	1	18	端部まるみ わずかなふくらみ	ゆるやかな弯曲 横なで	へら削り 高台	赤褐色	軟	〃	土師器
〃Ⅱ	〃 3.2～4.5 〃 12.3～13.1	10	7 5 14 …	端部まるみ	横なで	丸底 へら削り	〃	〃	〃	〃
皿	〃 1.3～2.7 〃 11.5～16.1	4	4 23 29 31	端部まるみ 内側にまるくおわる(29)	外傾なで(4) わずかに外反(23,31)	平底 へら削り 高台(4)	〃	〃	〃	〃
壺	〃 14.0 〃 15.5	1	27	端部断面三角	わずかなふくらみ 櫛目	丸底	黒褐色	〃 砂粒を多くふくむ	あらい櫛目	〃

第5図　土　器　類　(3,9,8,16,17は黒色土器)　(数字は土器整理番号を示す)



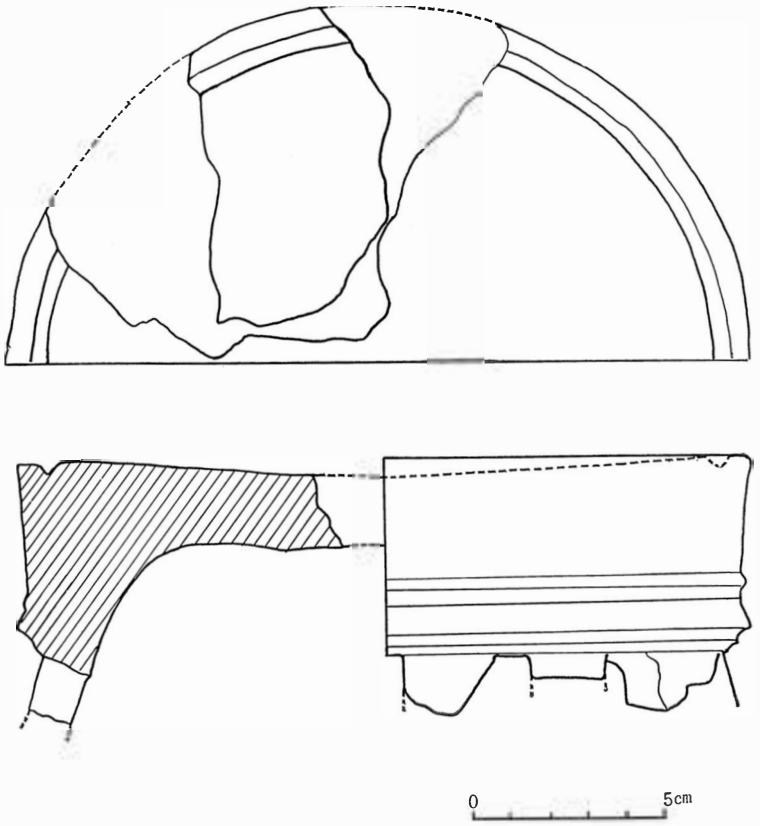
第8図版　　左上より　16，18，11，23，2
右上より　9，13，10，19，30（数字は土器整理番号）



(3) その他

この調査によって検出したものではないが，土地所有者の阿部岩蔵氏が発見したものに円面硯がある。（第6図）

第6図　円面硯（浪花勇次郎氏原図，立花博複写）



5 考　察

入田瓦窯跡の調査概要は以上のようである。この調査に基づき入田瓦窯の性格を考えたいと思う。

この瓦窯は，地下式の有段の登り窯であり，この規模は飛鳥寺瓦窯址にも比肩されるべきもので，構造においても類似したものである。県内には，いくつかの瓦窯跡が知られているが，そのほとんどは，痕跡をとどめるものか，または未調査のものである。[註(1)]

瓦窯跡としてその全てが明らかになったのは，これが県内唯一といってもよい。

この瓦窯と有機的関係にあった瓦の供給先は，どこであったろうか。この手がかりになるのは，瓦の出土地であることはいうまでもない。この瓦窯で検出した二種類の軒平瓦の意匠の特色からその出土地を県内に求めると「石井廃寺址」「旧常楽寺址（伝）」「国分尼寺址（伝）」の三ケ所である。「石井廃寺」の金堂址等から出土したものとA類軒平瓦との比較において，一見きわめて類似し，文[註(2)]様形式は同式とみてよいが，それとは中心飾の上下が逆であり，したがって，中心飾から左右にのびる唐草文の反転方向が異なる。また細部においても多少の違いがみられ，同笵とは考えられない。[註(3)]「旧常楽寺址（伝）」の出土瓦とも異なり，「国分尼寺址」のそれは限られた小破片で内区文様が不明であるため比較することは困難である。文様形式からみて，石井廃寺の出土瓦の造瓦の時代と時代差の大きくない頃にこの瓦窯の使用があったと思われる。陰刻の文様をもつB類軒平瓦の出土地は，いままでにまだ知られていない。この瓦窯で焼成された瓦は厳密にいえば県内において未見であるといわざるをえない。その出土を俟ってこの供給先の解明をしたい。

瓦類とともに土器の出土があるが，この土器の中に黒色土器がみられる。黒色土器は，これが県内初見のものである。この黒色土器は，口縁径14.7〜16.4センチメートル，器高5.3〜6.0センチメート

ルの法量をもつ５個体の杯である。口経比（内部の深さ×100/口径）は32.0〜32.3を示す。内部は漆黒色で幅２ミリメートル程度の箆で横に，しかも順手方向に，６センチメートル程の長さで，丁寧に磨き内面調整をしてある。外縁の口縁付近は黒色を呈し，体部は赤褐色であり，底部には低い付高台のついたものである。底部はへら削り，口縁部は「なで」その他は「箆磨き」によって器面が整形されている。この黒色土器は，畿内では８世紀後半にその初現があり，９世紀から10世紀にかけ盛行したといわれている。この出土の黒色土器は，この形態，成形からみて第１期末〜２期のものと思われる。[註(4)]平安初期と考えて大差はないと考えられる。また，これらの土器は，二次的な遺物であるとも考えており，[註(5)]今後の課題としたい。

以上，若干の考察を加えてきたがこの瓦窯における瓦の焼成は，奈良時代に使用され，平安時代初期には，瓦の焼成が廃止されたものと考える。その使用期間中にあたっては，壁面の剥落補修の状態から考え，２〜３回ぐらいの補修が行なわれたものと思われる。

おわりに，厳寒の中での調査であったにもかかわらず，小松島西高校の郷土研究クラブの諸君の献身的な協力と阿部岩蔵氏ご夫妻のあたたかい接遇を深く感謝し，この瓦窯の調査報告とする。

（註）

⑴　徳島県文化財調査報告書第７集「徳島県遺跡目録」
⑵　吉川弘文館発行「石井」
⑶　石川重平氏「阿波古瓦の研究」徳島教育
⑷　日本の考古学，歴史時代上
⑸　稲垣晋也氏「瓦器埦の成立と展開」日本歴史考古学論叢２

徳島県那賀郡上那賀町古屋岩陰遺跡調査概報

立　　花　　博

1．は　じ　め　に

昭和40年８月，徳島県博物同好会の会員が主体となり，徳島県博物館が主催して那賀川の上流地域の自然調査を行なった。このとき，上那賀町古屋にある石灰岩の岩陰から石灰華のついた二枚貝（ヤマトシジミ）の貝殻を採集したことを調査員に聞き，ただちに現地におもむき，その岩陰の表面採集をしたところ，条痕文土器片を一片採集することができ，縄文式土器を包含する岩陰遺跡であることの目やすがついた。その後，洞穴遺跡の調査のため高知女子大岡本健児先生が来県されたのを機に現地をみられ，有望な遺跡として「日本の洞穴遺跡」に「那賀郡上那賀町古屋岩陰遺跡」として紹介された。

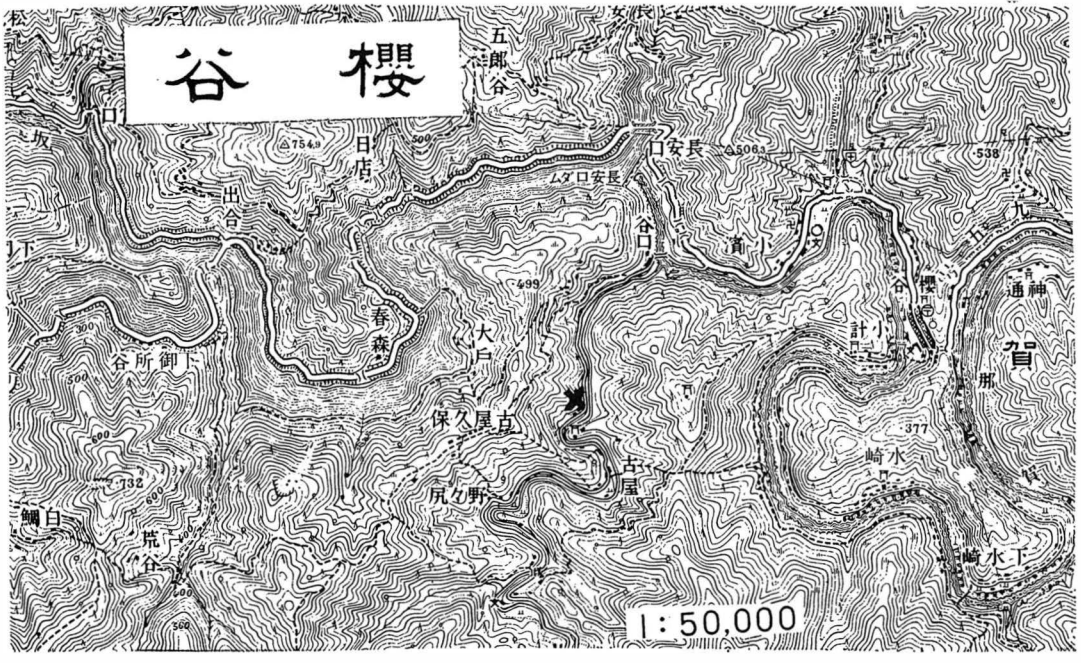
2．遺　跡　の　位　置

遺跡は，徳島県那賀郡上那賀町古屋字堂見谷３番地の１に位置している岩陰である。

上那賀町は，旧宮浜村と旧平谷村が合併した町で，遺跡は旧宮浜村に属す。ここは源を高知県境に発し，県中央を東流する那賀川の

第１図

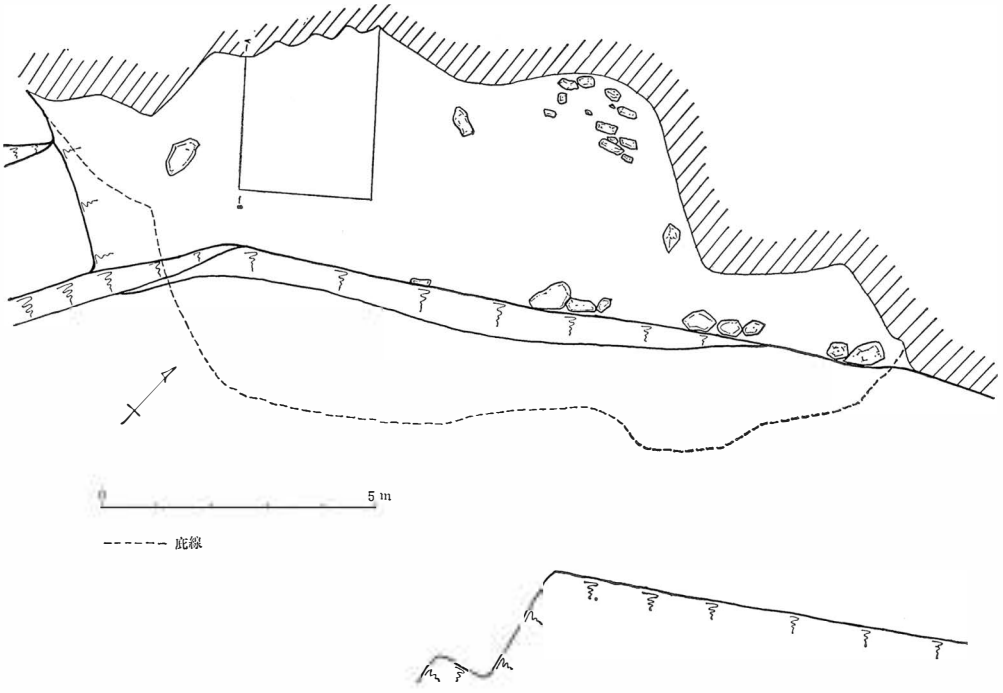
第２図　　×：岩陰遺跡



第1図版　岩陰遺跡の石灰岩の露頭

流域の渓谷に開けた集落であり，奥地の木頭村とともに杉の産地として知られている。戦後，開発がすすみ，長安口ダムや発電所が建設されたりして，往時の山間僻地の面影を失いつつある。この川に沿って徳島と高知を結ぶ国道195号線が開通しており，これがこの地域の交通の動脈となっている。これを50キロメートル下らねば，平坦部にできることができない不便さも残っている。古屋はこの町にある長安口ダムの堰堤の下流約4～500メートルのところで合流する古屋川に沿って古屋林道がつ

第3図　遺　跡

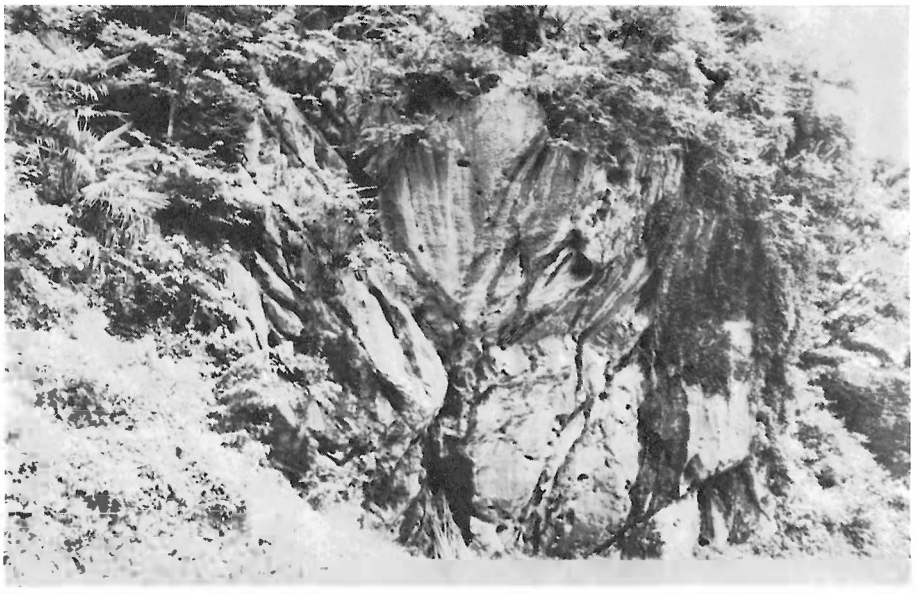


けられ，その古屋林道を約1.5キロメートル奥まった所にある小部落である。 その林道から約30メートルの高さで，古屋川の渓谷に向って南面する斜面上に石灰岩の大露頭の岩陰が遺跡である。（第１図第２図）（第１図版）

この岩陰は，標高約 260 メートル，頁岩を母岩とする秩父累帯の春ノ森層と呼ばれる石灰岩地帯でこの近辺には，いくつかの石灰岩の岩陰や洞穴が知られているが遺跡としての確認はされていない。

この岩陰は，ほぼ正南面し東西16.6メートル，岩陰の前にある水田面から庇までの高さ約13メートル，庇から下した垂線から岩陰壁面までの最大奥行は7.1メートルあり， 庇内で60平方メートルの広さの床面をもつ岩陰である。岩陰から林道までの斜面には，数段の棚田がつくられている。岩陰前面のテラスは水田となっている。（第３図）（第２図版）

第2図版　古 屋 岩 陰 遺 跡



3．調 査 の 概 況

昭和41年４月３日から６日までの４日間岡本健児，秋山泰両先生の指導と石丸洋（明大学生）岡本坦（早大学生），新居健介君の協力を得て調査を行なった。

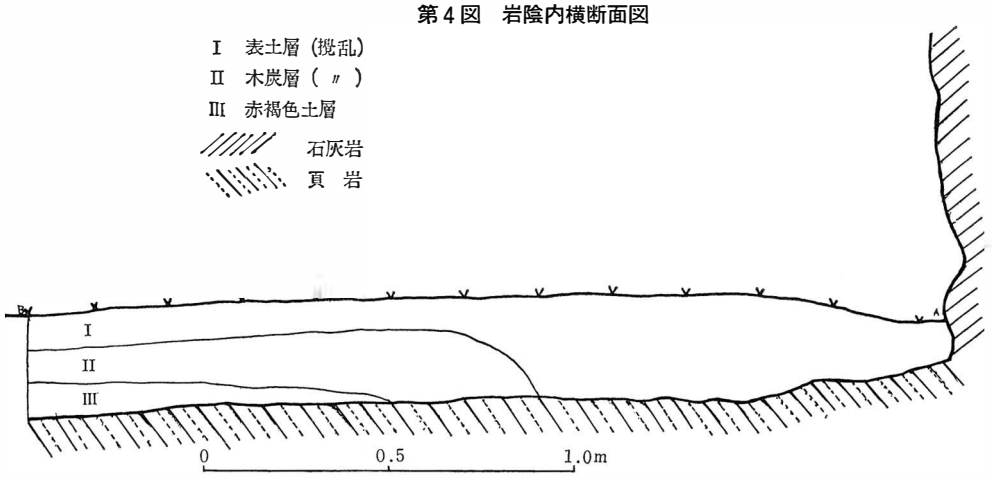
発掘区を岩陰内の西半部に2.5×2.5メートルの壁面に接する正方形の調査区域を設定し，この区域内で表土から剥離を行なっていった。（第３図）（第４図）

第１層は，岩陰内の表土とみなされる層で石灰岩の小石を含んだ灰白色の砂質土壌であり，木炭粉の混入もみられ，撹乱のいちじるしい層であった。この撹乱層から石鏃，土器片が発見され，またチャートの剥片および自然遺物のほとんどがこの層に包含されていた。

第２層は，木炭灰の堆積層である。かって土地所有者が木炭をつくったことがあるところだといわれるので，この層は，その残滓と思われる。

第３層は，褐色土層でこの層は薄く，岩陰前面の水田につづく層である。

第４図　岩陰内横断面図



第２層，第３層には，遺物の包含はみられなかった。第３層の下は，頁岩の岩盤となっており，表土下約30センチメートルの位置にある。このように堆積層が薄く，撹乱がいちじるしいために遺物包含層内の 遺物の層序は不明で， 土器の編年上必要なものを 失っていたことは 惜しまれることであった。しかし岩盤が傾斜する傾向がみられるので，前面の水田耕作土の下には，遺物包含層があると推定している。

４．出　土　遺　物

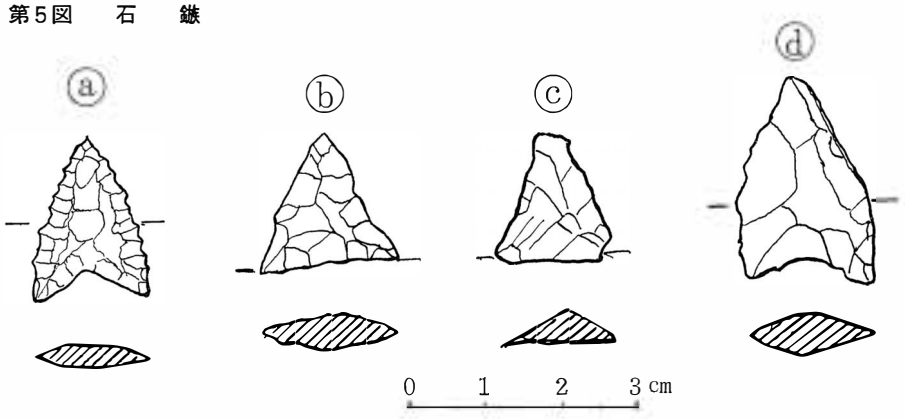
⑴　自　然　遺　物

撹乱された層には，人骨片，動物骨片，貝類が包含されていた。人骨片には，頭骨の破片，大腿骨の一部など，動物骨片には，ニホンジカの肢骨片，イノシシの下顎骨片，アナグマの上顎骨片，歯，オコジョの下骨片，キジ類の肢骨など，貝類は，カワニナが大部分であった。

⑵　石　　器（第５図）（第６図）

撹乱層中から石鏃が３点発見されたが，いずれもチャートを使い打製の石鏃である。それぞれの石鏃について述べよう。

第５図　　石　　鏃



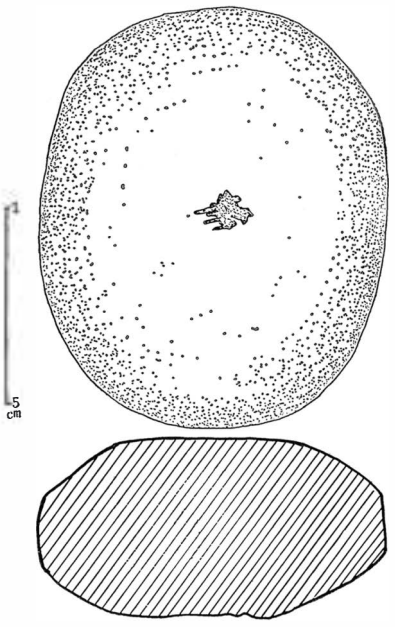
ⓐ長さ2.3センチメートル，厚さ0.4センチメートルでⓑⓒに比べやや大型である。形は，二等辺三角形を呈し基部には八字状のくりこみを施し，刃部には刺のある有刺鏃である。両面とも剥離加工をしてあり，断面は柳葉状をなし，精巧なつくりの石鏃である。

ⓑ長さ1.8センチメートル，厚さ0.5センチメートルの小型石鏃である。ⓐと同じように二等辺三角形を呈し基部にくりこみはない。断面は，菱形を呈し，両面とも剥離加工をしたものである。

ⓒ長さ1.7センチメートル，厚さ0.4センチメートルの小型石鏃で，形は二等辺三角形で，基部のくりこみはない。断面は，三角形状で片面は一次剥離であり他面は二次的な剥離を施したものである。

その他の石器には，長径11.7センチメートル，短径9.0センチメートルの楕円形で厚さ4.5センチメートルの砂岩の川原石を利用した敲石と思われるものを１個発見した。（第６図）

第6図　石　　器



⑶ **土　　器**（第３図版）土器は，撹乱層中に包含されていたものであり，いずれも小破片で，口縁部，底部と推定されるものはなく胴部と思われるものばかりである。そのうえ数も少なく，同一土器の破片と思われるものも１～５片であるため，器形，大きさなどを知るのはきわめて困難である。

土器の器面に施された文様から押捺文，条痕文，無文にわけられ，その胎土，文様からそれぞれ２形式に小分類される。

＜押捺文土器＞（第３図版１，写１）

押捺文の施文された土器片は合計４片あるが，その１つは８ミリメートル内外の厚さをもち，内外面ともに赤褐色の胎土に細かい砂粒を含み，焼成堅緻で良好な焼きあがりの土器である。文様は，内外面ともに連続したなだらかな山形文を横方向に施文している。山形文の波はその頂点間の長さ８ミリメートルを周期として施文され，山形刻線は２ミリメートル内外の幅をもち約２ミリメートル間隔に刻まれたものである。

他の３片の土器片は，６ミリメートル内外の厚さで黒褐色の胎土に１～２ミリメートルの化粧土を内外面につけ，胎土には，小さい石英粒を含み，焼成は前述の土器より軟い。外面は，横方向に連続した山形文は，振幅がきわめて小さく山形刻線は不明瞭であり，間隔もせまく密である。山形文の波の頂点間の距離は１センチメートルの周期で連続している。

＜条痕文土器＞（第３図版３写３）

条痕の施文された土器は３片あり，施文の状態，焼成からみて２つに分けられる。

その１つは，外面は灰褐色，内面は黒褐色で胎土は細かい砂粒を多量に含み，厚さ９ミリメートル

内外で比較的硬い焼きあがりの土器片である。外面には５～６本を単位として綾杉状に施文された条痕をもつものである。条痕は幅２ミリメートル内外の条が約３ミリメートル間隔で施文されている。内面は不明瞭であるが外面と同じように条痕が施文されている。

他の１つは，外面は赤褐色で１～２ミリメートルの化粧土がつけられ，胎土は黒褐色を呈し，細かい砂粒を含んだものである。約８ミリメートル内外の厚さをもち，比較的堅緻な焼きあがりの土器である。文様は内外面に施され，外面には，２ミリメートル前後の化粧土の上に極めて不明瞭であるが条痕を施文した痕跡が見られる。内面には幅２ミリメートルの条が３ミリメートル間隔に施文され，前記の条痕文の土器片にきわめて類似したものである。

＜無文土器＞（第３図版５写５）

内外面に施文の痕跡のない無文土器片は５片みられるが，焼成度からみて２つに分けられる。その１つは，外面は赤褐色，内面は褐色の化粧土が施され，胎土は黒色で８～９ミリメートルの厚さをもつ土器片である。胎土には比較的大きな砂粒を含み，焼成は良好の土器片である。内外面の化粧土中には，繊維痕と思われるものがみられる。

他の１つは，前記土器片より薄平で厚さは６ミリメートル前後である。内外両面ともに１ミリメートル程度の化粧土をかけ，胎土は黒色で微粒子の砂粒を含み，焼成は軟弱であり，化粧土も脆弱で薄く剥離されやすい。

５．お　わ　り　に

徳島県内で，縄文式土器を確実に出土した地は

① 徳島市城ノ内　城山
② 板野郡上板町神宅
③ 麻植郡鴨島町西麻植
④ 三好郡池田町
⑤ 〃　三加茂町
⑥ 阿南市福井町

の数ケ所にすぎない。このうち①～⑤は吉野川の沿岸にのぞむ山麓，丘陵上に位置し，⑥もまた盆地内に位置する。いずれも平坦地に近い所か，平坦地にのぞむ所にその包含地が知られている。しかし古屋岩陰遺跡は，前述の如く，僻遠の山間地で，その地にも縄文式土器の包含遺跡が認められたことは，県内の今後の研究，調査にも大きい影響を与えることになるだろうと思われる。

前記の縄文式土器の包含地の土器は，いずれも後～晩期に比定される。沈線文，磨消文がある器面調整法でつくられたものと聞いているが，押捺文，条痕文のある土器は知られてはいなかった。

本県は，縄文式土器の編年がいまだにできておらず，詳しい位置づけはできないが，四国の縄文式土器からみて，これらの土器は，不動岩屋遺跡，佐川，城ノ台遺跡に相当する縄文早期後半のものでなかろうかと思われる。

最後に，発掘調査にご指導いただいた岡本，秋山両先生をはじめ，岡本君，石丸君，新居君ならびにいろいろ便宜をはかっていただいた地元の方がた，さらに上那賀町白石の白石小学校校庭で石鏃１個(第５図ｄ)を採集されご報告いただいた同校長吉見哲夫先生にも深く謝意をあらわし報告とする。

第3図版　土　器（拓影）

図. 1

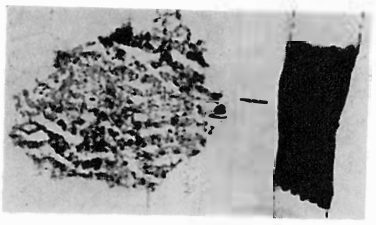


図. 2

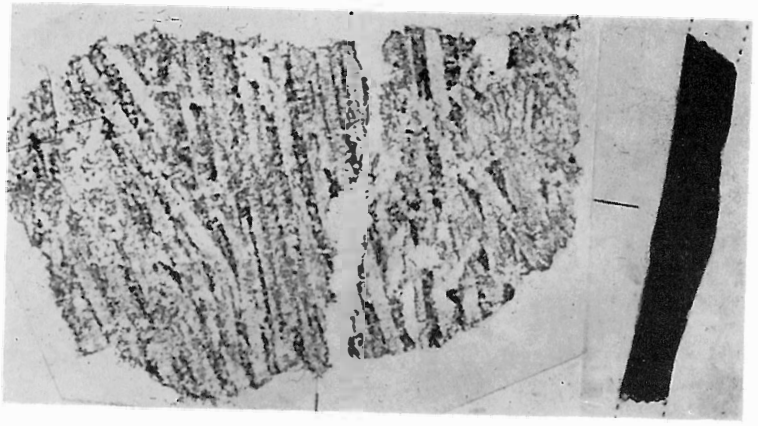


図. 3

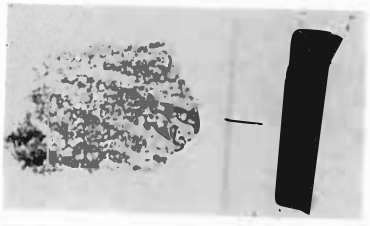


図. 4

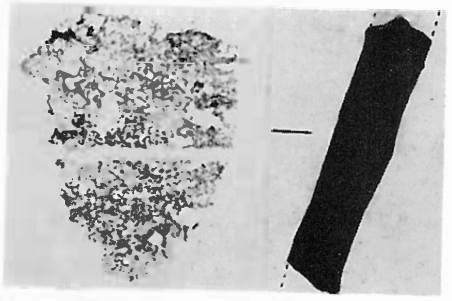
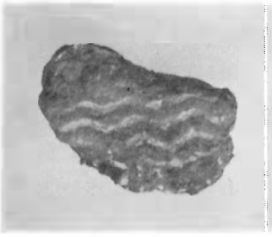


図. 5

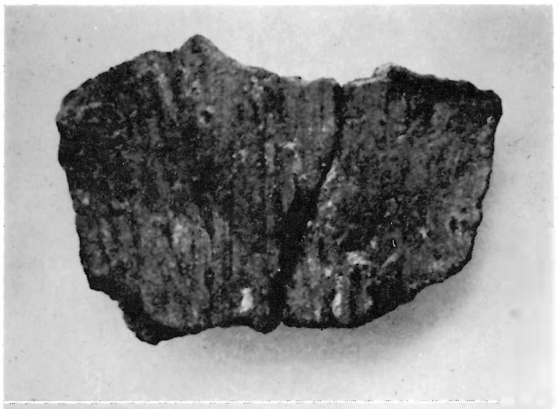
第3図版　土　器（写真）

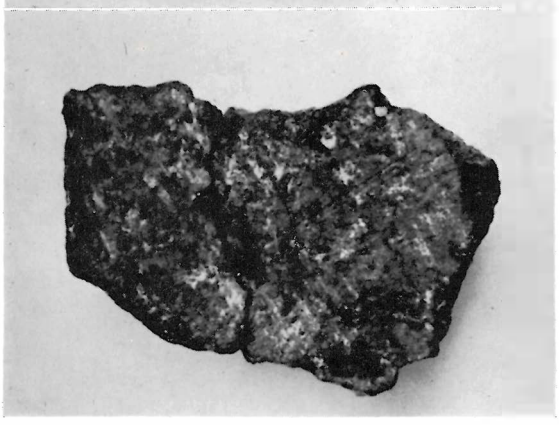


写．1（外面）

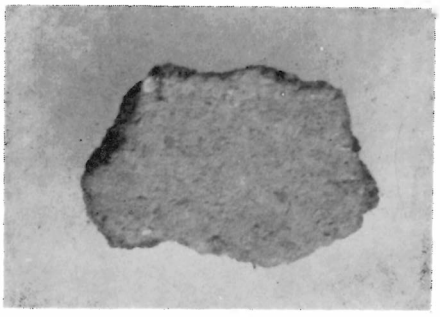
写．1（内面）

写．2（外面）





写．3（上・外面）　（下・内面）



写．4

写．5（外面）

写．5（内面）